

繪本豊臣勲功記

二編
七





13
2209
17

新公方立朝倉家御元服

屬明智出生

濃列御勳座信長謁義昭

屬淺井系圖



繪本豊臣勲功記二編卷之七

櫻澤堂山編輯

長岡ニ創体奉救護覺度 屬箕作虎急

前川虎はと道きて。後門猿牙小偶との信子世の中革謂きらん。然やどふ
一茶院覺度得業の御聖ハ長岡を教大輔藤孝が忠義小よりて、擒置の
難を経て、身ひに創矣。浮小潛蟄々。京都の地少と好松、永倉戦
難を経て、身ひに創矣。覺度を聖さの御奔走せ。尋ね、傳も懸り少乃方僅に半
止を経て、身ひに創矣。近隣の武士達を招び
みう隱果を玉ふ小走ら。御還俗す。密小近隣の武士達を招び
せし。小應せし。大館治教大浦守貞。同伊豫守晴忠。ニ創大和を度秀。
武田大膳左衛門義統。治田勘解由左衛門尉清延。京極をはじめ高成。和田伊勢守
惟政。毛利治教が惣孫長よ野中勢大浦秀政。同佐渡ち延長阪河山城守

信賢同肥後守忠直二階堂猪瀬も秀。大和守教が浦孝家橋島
玄蕃元照光とそじめ。外波是の軍乙人東流のゆく衆をことどものづ
きも戰國小主ノアミタ。家主も苦ふて。立ててかね被持あしがく。
自力も小脇もと相應の國守と御頼もあそ。大將軍をさらはし。
當主まで六角義徳入道。當國の大名とのひ。故將軍の所代小姓官領
代小補せらまつる恩顧の由緒もこきあそひ。緒りきん詞もあらじ。と大
館治部大輔宗貞と御使者とて時をそろふ。佐々木家の内乱のまき
程をしきまづ。家系くや御景もまわらせぞ。朝ての果トと諱定あひて御色
永祿九年の春。若狭の武田義経より。若列へ所勤度の事と重くあざう。
こまくすて秋の初。所近侍僅や一具した多ひ。若狭の所載あり。たゞ國被
されば太義計策。此地ばかりの施しがく。又他國へ所出のことを思へ也。

お年 機会うら六角義徳使者ビ多からセ。多ぎに南へ所勤度あぐくと言ふ
奉り。こそ新公方家家大院へ。身ひ。同ド年付多ひ。そひ。若列へ所
ある。僕へ所うち。義徳の嫡子右衛門曾義弼。所途不參よ。親音寺の城
へ寄まわら。難衛のこととも尋常ならね。新公方殊不安達まへ。六角
父アセ近の古さき。義兵を挙げて足利家を再び與へまあらむ事。偏小佐く本
の躰力。と最頼母へ。命せり。と義徳義弼誰を。所奉ひや。あげる。
遂に。所松永保を謀罪を玉さん事。神速小せんと存がま。この
三四年内。私あり。城中の諸士。多く小誅定。致つまらだ。是小固く
當年。此侵城中小津。草。年草。り。惟。で。軍。く。征。登。う。修。て。と。言
小生るに。發ふと。かがさき。此歲。ひ。残。日。も。微。し。表。こそ。ほ。然。ふ。と。て。表。小
津。越。年。も。と。か。新。公。方。と。自。國。小。移。へ。奉。ま。し。と。本。心。を。尋。め。ふ。

遠父子三好の二人小忙まき。峰容をまわらせ不意と伐れと計りしあう。既當
年も養うて。何まば水祿十一年かんぬ。某須父子と之が家とも特まつれ
て。あらかじめ有係故將軍の御連枝を戒せん事も最隠。と心も右方
定まらず。正月も稍過る。正月初旬ふうりく。情ふくこの家どう使者さ
う。此月在波帝前義宗公將軍ふからせし。多ひ一ども無ふき御殿
見の人もかさま。某禪父子と酒をしゆ。義弼管領小浦まで間。お車
と執達せらる。御教書をりて。命下する。某禪父子と。と拜。者躍
ちる。返すらも。然るべ。算ふる。金倉に。新ひ。方を少多小計。まわらせと。そ車の
日衣を。かよど。千萬考をとり。長岡大館。一夕飯酒。邊條の忠臣。曬
近。そ跡急小車を謀らざれば。嘗此より。主を。將。善作の城へ成らせ
參り。虚を窮く。殺せんり。と密謀の方。御を。立。義弼軽く御帝

従候。春小忙り候とも。遠山塞の松柏のまへ。指し愛號風情も。怡
従東の所皆散の。と。義弼居城。算作の城へ成せらる。猶。而
櫻花。唐夷く。従候。でも。隣家の東花も。いふとう。重ねば。終日花や。小酔酒
と。謂。輕危を犯せ。至。そん。小門。歴。ふも。多く。まわらせん。と。勧め。阿。り。と。まう
一。新。公。方。を。望。う。と。令。せ。ある。然。り。今。日。御。城。を。と。従。亥。や。を。退
出。そ。彰。公。方。か。ハ。義。弼。が。明。天。の。り。よ。か。し。不。得。小。も。與。あ。ず。徳。小。か。が。く。め。され
南都。若。従。う。已。東。章。若。の。ま。して。隨。身。セ。一。長。岡。二。剣。御。用。を。企。み。忠
臣。事。が。情。ど。も。慰。め。を。と。か。が。一。め。一。そ。従。セ。燒。一。あ。ひ。る。が。難。と。ハ。ま
ら。ぞ。紙。扇。闇。よう。今。日。の。御。遊。ハ。峰。質。御。由。御。あ。ら。せ。ら。く。づ。い。だ。と。而。ま。ぐ
伊。賀。守。惟。改。う。諸。男。士。も。共。小。進。出。丈。の。み。から。を。例。試。に。と。日。系。す。使。者
あ。て。暫。時。集。頃。と。閑。遊。か。し。東。化。小。退。あ。せ。一。繰。あ。う。是。を。極。て。義。榮。う。

遣へまつて。使者うちへん。當朝公家と講りまあらを。自己よりか利と得ん。
と今日の企てあるよりはからんと。吾公せて長島をこ測る心を決し。今日
箕作の御宴こそ漢の字祖が鴻門の會小趣く小聲聲す。圓鏡鏡と
きるとのふとも誰とが林大會からんと。謂も早らぬ小傍す。和田伊賀ち惟
政室にて長岡源くお憂ひ多ひぞ。箕作の御宴小御事あらば。
咱撫大會とおまつらんと。重と小長岡人お怪び是下脅力を含せま
ちべ。如何の御園識城とども。亦破らん事難うじと続起て其
作の御供の門をと教ふるに。長岡にて剣を拵として大館宗風と同じ
時忠と野秀政一色並長喜我宿。某宿奈ハ矣。庫物とづ。己之三五キ。
の勇士候。後せり。承る承祿十年二月廿日。己の刻をとす。小箕作の株小
波瀬を玉ひ。某主右馬智義弼城外へ迎へてまつ。御案内

一參らせ。本丸小宮へとまつ。小殿の御座の御膳。一と締備の帳。あ
うち小出。御警の板細筵。少へ。紋の縁肥や。林泉ふれ。庭石。花石を
のねう。小塵も。眼小遮る。紅縁小愛ら。あらぬ。むと。も。複て大御食
安搬する。ことを仔細小観て。あき。まづ七種の御菓子。七宝。めぐら。荷緋袖
露盤。小椎く盛る。之。案脇の一財隔て。うか。小安。う。轄の。ま。洋能裁。翻の。う
けり。串貫。手。難う。花輪。羅。みの。あ。一錢。之。轄。七。鹽珍。う。す。海味
河伯の水。めぐら。山味。の。神仙の。尋ね。つらん。と。詮ふ。も。う。の。品。ぐ。と。四。茶
大軍の。底。丁。者。が。術。と。至。し。そ。を。料理。一。錢。が。難。小。蓮。祁。の。石。喬。精。も。こ。ま。ぶ
勝。ド。と。か。り。え。き。う。頃。く。あ。ま。く。ら。の。飲。食。の。うち。鮓。毒。を。加。へ。ん。と。謀。も。ど。も。
公。方。家。の。近。侍。の。門。の。御。毒。試。と。同。ひ。た。ま。だ。此。事。も。又。遂。も。と。別。小。計。策。と
ゆ。づ。ら。ー。う。が。先。此。と。お。相。伴。危。と。酒。酣。う。こ。ろ。小。膳。を。口。論。と。あ。さ。セ。と。お。は。蘆

六角義弼
新公方と
箕作小

請ト

害と
計



を寝ひいふもゆて殺せんと力量武術小勝き一ゆめ。三四十人撃出。處
の原中は假山険小計事とふくめて躰延そ外遠方形意の獨小名士
數をと埋伏を義弼一喝かへらん小歎と嘗号にして走て登りと謀合を近士
の個く一人も剣をと殿捕らんと準備せし。然ども長岡に御候。暁く陣も
徒駕せし若はた右小伺公と事を假せをすれ間もあらず。晴小新公方の
傍より行丸としの兜鹿冠室と起よりて源庭の櫻が下へあり侍る。義弼
者より声うけて移りて禮りて新公方家のまど附出もあれうち櫻ヶ
里と自りは血小徘徊あるこそ墨とふうとも速邊道を可以毛き。彭公
方舟へやされ。意うれ亭主の言貌庭小放り花の多し。尋常からぬ風情
あきばへし別の瞬焉あらん小とく停らば無もまをらめ。以まの邊の花はあ
が深うらんふや試。參まとは屬の詞也。あと余せらる小義弼も心安途て

詠。竹丸今へての籠すと家冰の滌と垂り樹生この茂隣と蘿ひ。
そよう假山のよ小聲。四方と爲と視流をす。極も力大。二十枚の繩索
の際小蘿頬と。行丸さてと心不和。豪財亭庵小室もつて御前小
朝ひ。朝もくらべ。ひくも亭主の地主を厚く称花名本かかひ。中一小ひて
殊う花の聲。南西小小るく風へ假。假山の滌隣こそ與あることにて假
つば上様小も假面へ御座を福。キニミミよ。とりふそ小屬て義弼もよ死やど
きと一荷お然が假うの假山へ。遊小園て設立。ときば御心小も僅ひましき
然居あづら因と。身ふ景え。一院所缺と勧め。余聲させ玉と謂つも。御先
小起て庭前へお下さと高を。御極小からせ玉ふ據みて密と長岡をめ
よせらき。義弼厥量の兼備を。小も篠山の隣のまからじ。城中都て手
と酸づき。拒塞とし。ひとひと篠山。歎をとば道す。路もからん。連も死ぬべ

き自身をと懃る事做出して蓬をびきとしまさんも。利家の名前おなまが
こ其方候がもと運小信うきをもと外思を患うかと恩石断くわんせつてまつみを成
養國藤孝とうこう心こころを効こうめし小舎こやと譲ゆずし小背門の嫌外けんがいの施崖しき
く諭ゆうき。要法の傳つたえも見みて候まつ御運ごうんを天あま小信うきせらひ波絶崖はざわ
遁とおきとさせせすふべし。頃ほどて和田伊賀わだいがと龍谷りゆこくをあたへまつ今いまはあち
惟政波螺外はなわ門迎不花出作おほなは。はく此後このごろ洋出おほなと且また所良そよと所權微
の局きょく門もんうち掛置かじせせみみ。厥くるをまた。他日小津おづと小津桶おづとうを
傳つた小款通こくわん。時とき小障さや小小居こぢまも壁かべよう敵てき走はしまやせんと言いふ方ほうと
ぞや。も準備そなへと稟うながし御ご。義弼ぎはりも見え。假山かざんの傳つたえ不淨三度ふじょうさんどと詔のけ。種たねの具ぐと
背せき門もんの方がた一いつまわらじと自身じしんの亭座ていざ小こも近ちか。公方こうぼう與よ花はなの下したへ渡わた御ごましを
りも送おもて出だもそーと侯こうをもと者もの孝たかも歌うたうをと。義弼ぎはりも對むかひ公方こうぼう

も例たとの如ご。御桶おと小築おさり合あせ。小臣おとし剝むし同ひと秉もてん。と亭座ていざ追おままと
して。二に側そば小築おさり。背門せきもん。走はし。御桶おとは葦いのし。觀音寺山くわんうじやま。所傳そ傳つた
と報ほ承うけて。祖徳そとく。小築おさり。御桶おとは。但ただし。公方家こうぼうけ。と背せき小築おさりと負
きやらせ。翻ひるぎが像ぞうく小築おさり。門もんの西にし。傳つたえて走はし。と遙とほ小音總こゑづのと心安こころあん。

御おくふして。兩ふた手て。馳は。難ひく。此こも。道みち得とた。多おか。こと。御運ごうん。も。走は。ま。御家ごけ再な尊そん。の。之の。相あり。想おも。定さだ。所ところ本もと意い。と。遙とほ。走は。玉たま。小聲こゑひ。と。作つく。起あ。偏へん。奔は。

湖こ水みずと當あて。零れい行ゆ。と。ひ。と。

新公方出で列れつ枯かれ朝あさ倉くら家いえ属ぞく朝あさ倉くら系けい圖ず

漢か者じ。之の。ん。ぞ。龍りゆう。と。綱つな。と。傳つたえ。然しか。や。ど。小。算さん。化か。の。城じゆ。中なか。少すくな。義ぎ。弼はり。は。小
殖しつ。う。々うか。假ま。山さん。陰いん。小こ。御ご。出で。あ。ら。ば。範はん。中なか。の。多お。と。情じやう。小こ。音おと。傳つたえ。と。約あく。



御宿泊中。ひきと使と來らせ。御桶のうちを伺ひ。是か便憤て
走追り。御通殿の扁門小御室と攝をとる。新公方家ゆゑを
まことじ。長岡と刈も相見。とおる小義弼うち難き。往浦の房
て訊き。兜庵後行丸。とおる小義弼うち難き。往浦の房
たかひぬと。親なる寺山へ還御。あしと所うち大下懐惣と養ふやねと
勞つ。縛よと奉車を捨りて。脇ゆど詮。東西のうち小御音寺山より
使者。意乗うて。新公方小い被城守。還御。家をす。告がらまことに
まをく。帽き。遜をそりづく。朝ぎ。と心惑ひて。垂る下。聲聲震る
と要せ。おうとの「老」。寡と生て。義弼が被とひく。洞と流してり。一
ノ。遠程ようむ心極ふ。今天こそ君が奉臺のゆ。彰公方家を
祀。まみを。この好の納小難ひと謀り。事も。漏て。公方とも邊に

たまひ。縛ひ。家を遣事。あるべから。是利將軍御。重きの道す。ふ
れ。からん。然たま六官昌殿。そめらん縛。決て。傳へり。主。子。升。影
公方家當園へ。御す。忍歎退治。玉。將軍家家の尊命。府と
再興せん。と。作。本の家と。情。を。あ。ハ。ら。失。物。の。名。參。ら。も。然
う。と。主。人の。御。心。小。天。魔。の。魅。う。し。小。や。こ。き。と。縛。つ。ま。わ。り。た。事。武。勇。の
家。計。派。強。と。り。ふ。一。當。家。小。於。ハ。前。將。軍。光。深。院。殿。の。因。澤。ふ。く。業
種。入。通。そ。そ。管。領。代。と。そ。き。ら。の。宣。か。と。ち。や。一。か。さ。ぶ。前。將。軍。の。射。小
三。好。と。誅。て。新。公。方。家。を。捕。佐。しま。や。ら。ま。き。を。善。り。ま。い。公。方。小。背。犯
達。ひ。報。達。を通。の。こ。め。小。與。力。一。斯。る。を。法。と。く。あ。い。と。人。倫。と。害。ひ
武。門。と。汚。せ。り。先。祖。源。と。秀。義。十。有。余。代。の。子。孫。と。て。一。度。も。隸。及
の。名。と。ら。を。幸。う。れ。新。公。方。家。と。遠。遺。佐。と。家。を。極。き。一。ハ。ま。い。不

先祖の靈の導引あるふあらず。登く遙賊之奸体小無力の心と違實
せらき忠心義氣ぞ潔すして新公方家小舟將佐稟し。安々とおせ小
残した多と理責て諒む少ぞ。義絆大いに而目にげ小言向もかく。
遂小害心を止やうる。まへ國紀新公方家ハ長岡ニ瀬和田の子小虎
口付想を救ひ至ひ湖と當て零行きりが湧漫徑の間小水諸所へ
て右平小湖水の途あゆ。漂ぐとて露彌と。浮舟のあゆもとと右見
左見と行候小葦甚草稠す浦のうち。渓倦だよ。累捨し。築戸の小舟の因へり
と天の駄と唇臣四個雀躍かして。無福また。怪しげ小帆席とまとめて中
一個の武士袖と起坐四個と見ゆ。誰かて。こもせらかと。向奉り。と和田惟政。御
酒さけと。ト。北緯と。あうの隨て告り。船は侍士頭小舟伏し。小服此侍奉り。緯
稍。二時。袖。拵。二袖を參らせんと。太金の嵩と。托摺て葦根小舟を。纏解焉。

一張二張掉すれど。小いつて行と漕放と。六七日と。流出す。風を順あり。心悦あ
ゆ。このふ小應も。單舟の横濱を。乗つて。東へ。夜も。休養て成す。と。六月東
山小膳。湖との夜累と。眺。敵氣を含む。垂れ花ふ。信勝。また。娘
そぞと船りひき。多の波のうゆく。曉。東ちう犯。剝鰐ふ。尾が崎。そつ犯玉。此犯
朽木宮内大捕貞綱。佑木本官守。耐定綱の没亂。の采地。うづまき。長岡ニ瀬
を使ひ。惜。また。多ひ。下す。嫡子河内守元綱。流布を民務。綱と有ら伴と。出でて。所逐
た。まづ。跡意を。御食應。まわら。も。此朽木宮の地形。ゆく。寛。りま。不。要。努
の集。今。偶ひ。と。若狹の武田義統。と。と。越前。の。竹食。と。津輕。も。素
朝倉と。武田と。ひど。と。あらぬ内縁。此武田義統の。信亂。う。物。の。元。と。の。義。統。の。室。の。不。好。草
朝食。義。統。の。室。の。義。統。の。性。す。か。う。う。義。統。た。右。か。う。う。義。統。ひ。ま。ひ。ら。セ。周。年。四。月。の
の。室。の。武。田。義。統。の。相。父。武。田。元。光。の。母。也。う。ま。ひ。義。統。た。右。か。う。う。義。統。ひ。ま。ひ。ら。セ。周。年。四。月。の
小。溝。若。使。の。國。一。所。動。度。あ。此。も。將。依。の。諸。侯。を。招。け。義。統。と。り。て。朝

新公方
死場を出て
琵琶湖の
活水と草津

まゆ人



倉へ所糧あらせらる。升も越前國の朝倉とひふ。人至三十代。孝徳天皇
第二の皇子す有間王の皇子孝景の王孫て日下部の姓と賜す。但馬の國小
ト向まへゆく。子孫として武士とあきらめ但馬朝東郡船井村の地領
あらむ。武門の名譽累代して朝倉御右衛門尉廣景元の領を金子せ
しが足利宗氏丹羽條材小義景と奉さる。多び。向廣景但馬うを
參。足利尾張守高經。新波武衛の先祖で。朝倉の守護職をの隊小かう。廣景軍忠援群を
と。う徑ことを深く賞ひ。自家の執事小補し。朝倉の足利於黒
丸の城主。も。是より數代相續して文正年中新波康武衛義家
督と争ふ事ふ。よそ。自家もかまて合戦を。ひの朝倉へ彈心たまつ
尉殿景と。武勇絶倫の猛将。おもべ。越前一國を。欣靡り。威と隣國小
奮ひ。うが應仁大亂の晦を至りて細川勝元の陣小かう。數發軍功

と頸一ノまへ集。山殿御賞。義ありて。越前守護。うむ。遼福冠人御
教書。しり。陪臣の列と。極く大名の座。小至らましく。被服景ゆく。仁義と
重す。治國。政事。小非道なし。敏景生涯の智。是き。と。入道す。て
英林と号す。目赤大野郡。一糸谷小城を。築かれ。此とりて。奉城とし。
文明十三年七月。す。自修小館舍を。捐こう。其子孫。在。蔚成景
家督。うしが六年を。徑て。文明十八年七月。二日。八歳。て。早世す。氏家
嫡子。彈正。在。貞景。十四歳。小。家督。と。相續。延。小。彈正。貞景。ハ。文武満
足の良將。かく。將軍。忠功。も。く。か。公。方。家。こ。き。と。御。相。伴。義。小。く
三。ら。ま。家。を。渡。ま。事。古。七。の。春。秋。と。徑。て。永。正。九。年。三。月。廿。五。日。鷹。野。の
不。意。小。卒。去。せ。る。其。子。孝。景。十九。歳。て。家。督。う。ま。う。國。政。ハ。ミ。テ。敵。又。ハ。浦
貞景の養。左。唐。尉。殿。景。を。万。端。こ。き。と。執行。ひ。敷。曾。郡。令。う。湯。の。城。小。佐。せ。う。又。孝。景
と。の。ふ。人。通。く。家。幅。と。号。を。万。端。こ。き。と。執行。ひ。敷。曾。郡。令。う。湯。の。城。小。佐。せ。う。又。孝。景

の若狭の領主武田大膳主元光の妹を迎て妻とす。然ども男ふを娶りてに列佐本氏綱の末子せんとて養ふと。孫次席信宗と号せし。天文十七年三月廿七日孝永行年五十六歳。一季曾小卒ませり。孝永生涯佛院と號し。寺院あると達るみうか。徽山小寺く佛宇と達る。近べ信永十六歳朝食の家と相候する。時の公卿領細川清允娘と送てあまき小娘。一光源院殿義晴の御字と賜。たまに曾義景と草むらとりども。性質古又實父少供もやりて。武道ふ跡く剣獣慈源尼もて。而て其の治力うそといども。武勇の臣家多紀とす。如隣道の龍王とぞ。

新公方を朝食家御衣服属相留止性

有德は君の千辛万苦をとども更よくおととを儀甚し。至徳の君の

往々金屋小僧むとのふとも地所でこれと居置せど。然やどふ新公方家
ゆえもよく苦勞し。もども。新選用出でまつて。おもくめに別の地とひ
さを至ひ。越前は朝食と御頼あて。別使と達を。をひづる小朝食家
の長官急役備後守朝食九郎左衛門。墨紀ハ宗像のふき。御使者と迎て是
と御續奉。御迎こそ。御食猿八郎。墨紀立百余ひと。率領て
若狭國へ奉。と。御食猿八郎。新公方家御挽斜。からだましくて。金下。集。九月
終日武田の居城と御發駕。あり。越前の國へ。御まつも。朝食を齋を集
累紀入道伊丹。甚子守勢が肺累紀。餐應の役。おもじろ。達を。冬。御
蒙そて。國境まで。御出迎。奉。金かぬの城へ。靖。おもじら。と。孫八郎
墨紀ハ遠遠の房と。當を。式教。正。小叙。と。今。人。義。墨。より。朝食。出。雲
き。と。使者と。御。着の首尾と。實。奉。奉。人。道。伊。丹。も。日。小。休。莫。と。見

て奔走せし。新公方家が所時も速く。義景は御旗を奉らまんと兵主との
懇懃をき。東谷へ御使者を遣らる。遙義と遍く今下をもどし。右左近の反
ひする。主而謂と伊納小畑。朝倉家田原代の説下。坂井七郎重忠といふ者
あり。利仁將軍の後胤か。東義景の一族なり。坂井一郡居に本庄の領主として。
代々武勇の名を續さん。然る小を東七郎重忠心を實の聲を守り更に。
義景を養ふ忍。本庄の城下橋乾を合戦小役ふこととも。重忠忠を號す。
車駕幸領ふと。門徒の一揆諸不小參り。合戦の最中あまび橋に重忠がさ
きりて。遂小歎。さくして。越前と遁去。加賀の國へ疊て行ぬ。當年か為
ひ車駕幸領ふと。門徒の一揆諸不小參り。合戦の最中あまび橋に重忠がさ
たうと。幸ひふとことをと拳用。大將を下さる。始に七年得ふと
怪び。一揆輩を引棄つと。城内へ私入さんと。義景こきと防ぐ爲ふ
屢出陣へたるが故。新公方家の御旗拳もよめく延りると

あり。斯うい果ての時も。義景ねば。長岡密か。立方へ重つて。加賀城前を和強
せしむ。無ども。年をや冬をそ。國の例は深雪也。進退とも。小自由あらねば。
京都御奉向の事。ハ明暦小延をらむ。同年十一月廿二日。金子亭と。御辭
つて。一茶翁。御極あり。安養寺までり。御旅館す。因生ごく眷を途へ
たる。永禄十一年と。うぬきども。弥生あらわ。害消を。立方小約
び玉ひ。日を算て。ぞおなしづる。ひやう二月の天。ふひりり。或ぬ義景。本養
寺小祇候し。誰で。言叶。うる。連居。退伐の大將軍。が御。光賤みみて。然る
筆うちを。吉日を。御撰。あそがされ。御名字を。定やきを。立づき。締め。と
勅め。まぬれせぬ。よう。遠義り。こも。有が。ほ。ほ。行ひり。よ。ま。と。え。先
義景を。宮領代。小准せら。御加冠の役。勤む。きむ。ね。今下を。き。と。ふ
よう。義景。育。ごく。御奉り。全ト。四月吉日。吉日。吉時。ま。と。新公

覺慶

朝倉家

義昭と
捷立と

号らせ



家の義景が正形小説待たてまたらせ。櫻式もごそく執事ひ大禮の
奉首尾全く済障を收納せし。御先代の例小信せ義昭と号せ
玉ふ。義景より國光の脚力。御馬からび小金銀装の鞍襯あきと
駕じて賀て奉て君臣の歡声一々豔谷小彌滿せし。然ども義昭君小
おうせらまとい。遠等は事を悦びぬを。只當見君母君の仇と。こ
好松永と。征伐の事のとちに中かがへゆき。除うてかくておじる
が。茲不近湊義昭君の御。仰みど下り出さき。御意と慰めやらす。
朝倉家の新主として明智十日衛光秀とひるあり。其原姓を尊ぶ
小農列明智の城主。ト野守光綱が嫡子として上波ひよ生す。氏族を。そ
此土改といふ家の事。書和天皇は後胤守護光秀と。代伊賀守光基
の子。土改後濃守光衡。文治年中濃列の守護職たり。又五代土改

伯耆守頼清小四人の男をかわしが。二四里下野守頼兼東夷溝の智清
小居住せ。不異ぞもとて明智と稱とすを頼兼八代の孫。ト野守光綱の子と
光秀とひ。然る小光綱せして。光秀今猶幼稚。故父会津助光廉
の青。先個家督を継ぐ。明智小住と。开も此光秀初より。才智器量万人小勝。
英雄の風あるとひて。光廉も家頼母と。かひて。頼て家督を譲らむ。
と。餘利層て家宿と號す。然ども光秀武術を練。兵法を。家至んと。先
家督を。家宿の心中の望満足する。従事。家督を。と。堅く辞して。日暮と。幕を。軍
法。兵法。弓馬。術。そ。まづ。小。近。年。ま。る。を。統。流。引。そ。と。り。つ。て。光秀。こ
と。熱。凍。せん。と。野。と。く。山。と。野。と。野。と。野。と。野。と。野。と。野。と。野。と。野。と。野。
萬減も外さぬ。この御小主ます。然うして。治二年の四月。秋。藤道。こ
子義経。小殿。を。后。濃。列。一。圓。義。範。小。徑。ひ。廢。く。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。



通との好と悪を明智小左衛門義就懸てことを改め小光康達く
防ぐといひのも敵大軍にて擇起る小部の持つてと戰死の覚悟より光秀
かうび光康の長男・経承治元春。二男光忠達二人を遁さけと後の奥深教
本と。は追圍せらち止と勤むまと更小所用ひぞ。俗小戦死をもつてのこ遁
き氣色のあひ小光康がてのあひと或ひ怒り或ひをとして漸く小明智の城と
居し。諸方取くも光秀候へ城中を遁出。京都の初已と筋力として
始く彼の小瀬居るが妻從す候と扶助をも小寢人のオレ活計一ざ
く。然るべに大家小奉公して立身せよとおり。とも從事して候て國
を遍歴せんもいきあひと。満城天龍寺小觀縁あひて從事にて
のを置。妻を京都小止めかうんと。後日の朝を謂所なる小妻熟くと安
寝。終り。餘もの詞ふべきとも女の一回良人小聘。をひ離きがるを道とを

かまひ妻も共小体ひと。丈を鶴旗小園也。居かづら侍へ貞からだ。豈人かづら人かづらが
山河の風雨小艱まば妻もとも小煩心こそ操とひかへあらざりや。少くもとも
伴て至りと幾行とぞ揆詢く。小光秀もを理小屋。然ば同道せらきよ。
弘治二年九月下旬。黄梅もるもと一奇小都の室と辞去す。まづ鐵嶺
路小こうろざし。上杉景虎が武道を試みよ。より奥列の金津小河を薦
名盛氏かずら矣と拂り。宮城郡小路投て。伊達輝宗。南部小安信の家
風と考へ成へ下野の宇都宮。結城。喜連川を徑巡て。常陸の佐竹
ト總の千葉。安房の里奥をかんどのふ城下かみを徘徊。一家の風儀
と見聞の。然りて相列うち。後北条氏康の政道と何ひ。相模を越
て。續らる。今川義元の勇氣を量り。侵船を泊く。伊勢路を拂。小島
の強弱をねか。江列の地かみと六角。浅井。泉刻小束て。二号の奢侈。因幡を祭

七利元就
徹眼遠く

明智光秀

叛相を

観破す



秀・書
賢・書
武・書
義・書
誠・書

も別荘家の隊伍を勘得し。同國室の津小運日返尚び一ヶ月僅へ窮迫
競りぬ。倅も強も才ふあらざるべ肺健一ヶ月と進退得べく。
次の價を賤ふづ。倅よりからぬその朝小運にて貿ひうみ光秀を妻
貌に譽と譽う。憾氣もしく截撫て加毛子高の居小駒兩て。二日の
糧不代備。景美化もひき過て。雲列尼子の意を體え。防列小列
と大内代を居候せし。山口の城を一覽す。肝を傾かず。己きとあまく。び
感極一つ。敢方遠方と因迺を機會う。番号輩をも因へ替へ解詰
もきとも。諸官を。山口の割合へ響き行。遠响草。毛利家の長臣。
桂能登守を畜せし。光秀と居く鞠問ある。その智意。韓古丸み
らね。歴是と感佩。遠人をりて技術を。向うかと。大小用ひ。是と
と推挙すて。義列へ光秀を送り遣り。小元就をと呼ぶ。一見

せらきて眉と鬚め。遠者頑骨突出して。主相思よろづりぞ多ひ。主小
宗とあくべし。新小摺と。持物を。繩の思ひもよらず。と近侍小舎を
時服全般と。馳りまほ領む。と主遠くべ。と面を。されば。小姓
太小氣の毒あら。別小薦金と錢。そ義列の地と出さき。ゆゑに。主
よう豊後。小波海。かゝ。大友家の流儀と。同様。主列小。と長曾我部
の當流と。く。所保ち。紀列小。湯と。主野熊壁。主野小。今。山室。庵。
伊勢守。保山伊勢の御神迎江と。故く。京都小。東。主。水。御。室。年。の
主。末。う。極。て。漫威の如。小。翁。い。四。象。日。此。寺。小。洋。昌。の。譯。附。と。主。を。從。す
と。体。ひ。故。前。致。貢。小。額。次。より。高。船。小。便。官。と。得。て。板。小。都。長。清。村。か。ニ
称。念。寺。少。少。縁。據。と。あ。れ。ば。其。債。を。主。革。舍。と。借。て。こ。主。少。少。往。い。切。き。革
の。墨。師。と。四。個。が。と。豆。ふ。私。そ。と。と。も。窮。少。小。起。休。た。然。や。ど。小。水。縁。

光秀が心術
よく杞軍の
氣と看徳と
朝倉勢と
救出を



船のうの連
猪もぐや
波更か
羅又出
一方小雲
すく揚赤れ
有て旗絶の
かく虎のや
豹のかく白
のや曲楊の
やふほく
のくらが暴
云のほく
闇じくく青
き船方解さ
樓臺のやく
ふく赤ねの
申つらぬ、
こと有り候
こゝる爲雲
雲を闇さう
そづかく船
のすか藏
と有り候
走伏雲のれ

五年の穗加引本願寺門徒の輩若び一揆の發動とて越前領と掠る事。急
かに之を護るより朝倉左近の脅義軍不怒。一族方々も朝倉土佐守
景和と大將として數千の兵士と當面らる。糸弓數千の兵士と率ひ壇地が
加列奔向し。大聖寺敷地小河内月沫。御幸塚玉砂の邊小陣を布く。
遙响明号十日備軍先物の如彼不ふ類き。朝倉勢の陣の不そ小雨垂時
躰毛と觀るも小日ハ矢や薙刀成ふ。御幸塚の東小あまと一條の赤毛
冲うち。南の方へ傾流す。光秀遠氣を瞻仰。小毛毛しく一揆の門徒輩。
朝倉の陣中へ不意と駆んと殺れ。死らん然ども越前の陣中小是と幼
い輩も少く。そほ準備もさうと走漢あらもりこの誇りねど。朝
倉へ已が將佐ともり。敗軍させんも氣の毒ありと。生蓮草近に守る陣
小河内。詔氣の事と精々詮。次段の小心かく。事と辛密と生る小近は。

計思ひもす。人將小光秀の意せし條を詳ふ。船と土佐ち實もと
あり。總軍中へ徇曰。準備ぞとて。倩菟と。小栗と。門徒の一揆軍。數
百人を隊部。悄悄地小推進。越前方少ひ禦てよう。そほ準備と
待こと。まことに。發きもやらば。擧て登。此の隅崖被の切支小追詰。方ひつ先
斬起ると。光秀。雲霧時見。物を。が。思ひ。にて。ま。ま。ま。ま。
あらま。小角。し。忘。ま。を。走。駆。車。の。多。統。と。備。之。つ。続。之。と。追。詰。方。ひ。つ。先
外へうち。十四町も退。萬人。一揆の大將。善坂伯恭。ちが。通。乃。と。吃
と。思。て。得。と。火。幕。を。き。ひ。て。故。て。が。謀。を。そ。て。善。坂。が。奪。を。吃
馬。と。う。撃。と。疊。と。う。と。將。を。主。と。う。と。あ。ら。ん。右。頬。左。側。少。う。の。騎。を。
領地を當て。殿を。を。朝。倉。勢。の。お。り。ひ。の。便。不。退。敵。々。分。捕。争。十。手。小
新。捷。と。う。勝。岡。つ。う。と。號。詔。び。軍。を。纏。め。て。陣。陣。す。彼。光。秀。が。智。勇。

のれども。うし人義景ふ請ひまべ對面せばと收めか。その人物を孰ぞ見
る。ふ然と景を尋ね常あらむづくまく。素性を紀てこそと抱へ立而貫を繋へ
く。光秀原素賞をまへ。義景の心ふ恆ひと傳ふ。伺候し。軍論。名禪と
巧小一ノ目。ひづれ出力加増して。九千貫の禄を奉つ。新公方家當
國。御勤廬のまづ。主人義景の名代として。金が崎主を委ねよ。一
條公方家。すれ共の禮意あらせらむ。小時こそ得まこと患進
う。時を漸く衛ひめまこと。門に簾くもだれぬ。然る。新公
方家。一家。後所ありて。安泰寺。至く。バ光秀日毎小廻りまわらせ。
心中小なり。乃手朝倉の家中小ゆゑ。九千貫の禄を得きども。新公
輩のうちしき。舊家の老臣。小輕へからず。近來迷惑小なり。うり
今此君小昵近て。他日よ源あらう。胸供奉せば。將軍旗下の士とす。

先祖の家名も忽擧。得て。すむと。怯弱の義景。小遣もん。新公
方家と勤々まひ。尾張の智将信長。と荷擔らひだ。と思ふ。すうと
侍の人をき機会を顧調。義昭若へ。富田。小臣。隣臣の趣をりて。
斯う詫ひまく。思ひ多く。惟渴ども。當國。御勤廬。催て。御本意と
遂さを至さん。徳思ひもよらぬ。事小僧。も不謂い。主人義景怯弱す
こと。近頃。絶縁の舉止あらじ。君少も。御一ゆゑ。かく。今年六月廿九日
義景最愛の男。阿房丸。病死せ。よう。垂歎。とぞ。歎悲す。
國家は政事も顧む。児女同様の心中あまび。向て。義景を憑接せ玉す。
ゆう。義レ果て。すく。化國の良將となり。御祖とあらせ。みを。今
小臣君は。御為少く。余命と塵土小拋ち。御上宿の御馳つ。うらと。詞
を巧小音出し。とき。義昭君所へ。ゆき。沙の諸國を遍歷。つと。バ。

風土の奸醜武士の強弱種己と誠つらん中少能て尾濃小豆の鐵田上
總兵とのくすりをも。信長をと御事ある。光秀搜化と當事と控て入る
御用察う。其信長とのう人の實小近代の英雄あり。又張連昌とゆ
敵て君を京都へ還て奉る。信長は外へあり。惟在江戸と准本を御付と
あきと情徹て實主をふ。義昭君も恭悦す。明智が朝ハ足利家
再興をめし。神勅からん。而方僅心を決して。縁故ハ信長先達て密
小使者をさへ。故て速く濃列へ移る。よし。重きとり。今義姫と
離して去る。方便を知らむ。先秀がむりふ而と計りひりかせと。今余八十萬
誰んで。君はま一意義姫へ。御催促あり。やう。然て決着りまさす。バ
機因を頼までも。やう。今余生さきたぬと。重きより。公方同心と
も。ひよ野中勢大捕秀政。長岡を取大捕藤孝友人を攻阜城へ

遣さま偏小種ませ。あはよ。と。今載せらまし。信長一義かも疏をも。信
愛もまつ。飯部近名とぞなれ。たゞ

濃列衝動應信長鶴義昭 屬淺井系圖

知恵あり。とも。母小糸少。如。強暴あり。とも。時と後。不。能。ひ。鈴
と野長岡の兩人。信長が。下。陣。小。御。諸。り。と。そ。ま。う。じ。と。大。不。能。ひ。鈴。食
の心中。と。里。の。相。違。う。と。義。昭。と。傳。の。雲。と。傳。の。心。地。と。速。小。主。近。り。信。長。の。に
甘と。あく。言。は。せ。一。び。義。昭。君。小。ハ。逃。起。を。名。を。か。が。一。め。而。御。義。姫。を。御。へ
使。者。と。つ。ま。し。命。出。さ。る。御。詔。か。い。此。年。未。來。逃。走。か。ば。之。事。義。姫。を。御。へ
至。う。あ。る。然。る。小。糸。少。一。子。御。君。九。軍。せ。の。事。然。熟。の。心。義。姫。を。御。へ
心。あ。く。京都。進。封。の。儀。遠。あ。せ。う。然。る。す。不。美。濃。の。鐵。田。う。重。よ。る。趣。あ。ま。べ
と。可。濃。列。へ。稿。を。と。み。祠。う。然。ば。と。て。義。姫。も。今。小。糸。少。ら。を。忠。貞。所。小。せ。ら。ま。二。作。

本懐と余せ下さる。義累所て人を疊き。左を主と指む。是
刻後を遠う。義累が心を慰めんと義昭君より真筆の謝書を下
さる。

文子

今度當國乾退座忠義神妙恩食候向後身上
不可見放猶後大藏局可逃者也

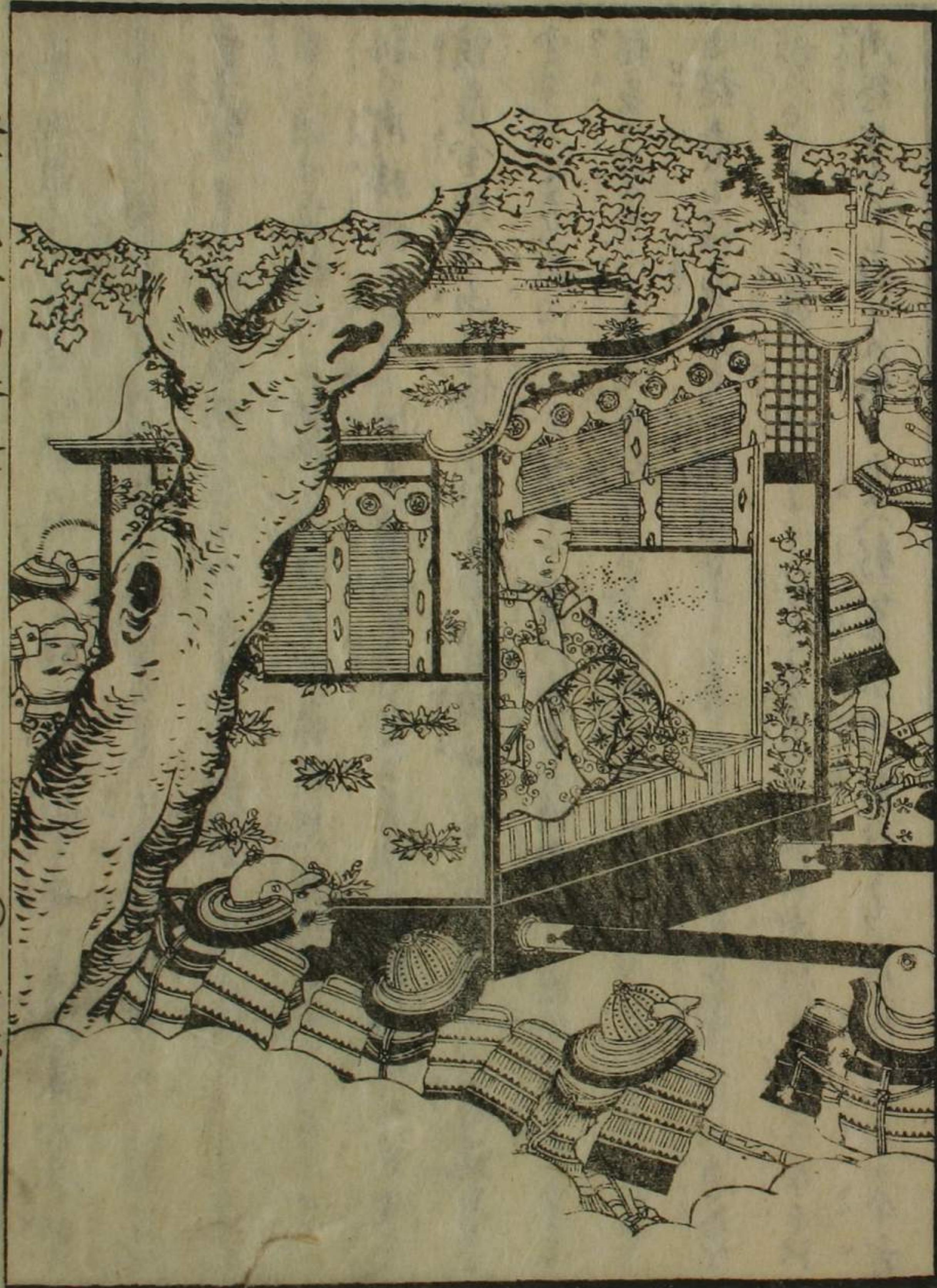
七月四日

謝列

朝倉左衛門留

物ごとく余生を御退度をうふ。義累とく御見送の儀事
にて中勢か浦累恒からひる仙波源右衛兩人不二年半人を一派て贈次と
詔請へたまう。七月十六日一葉谷安養寺と御辞あらせらき供奉ま
からも門々ハ長園三洞と野方など一葉谷より福井へり府中鶴波の里

を経て吉日ハ今庄小止宿ましく翌十七日ハ遙に路小入らせをひ本トは地名
堂小御宿す。雲門休憩めさす不へ當國小谷の浅井長治來ときて。
君小鶴このとね小吉休悟寺へ請侍へ。町寧小御食奉へたまう。越前のか固れ
此所より所謝辞をされ返さをこ多不濃引より御途子を不被行内守
菅谷右左衛門藤勝久。二年半強小て奉向。時次の警直をかへるや
らしと小吉不二日御信寄あらせらき此地を御辞あらせば。長治も半途まで
御借く。春照野を僕く。森門へまづとお向。故阜より村井長門も。
鳥田和之助川まで御進ひとをまづしづ。淺井長治へこまかくて御暇をす
う。此より高麗の東地をまづ。ゆく御宿地寧らを多く。園が原らを含井と
越赤坂。身近。河濱をみて漸く波良小谷と多く。村井長門。長門小
缺かく。軌道ひ西のほと正寺をりて所旅館と定め所客意の人々と語く。



交々伺候して美味珍饌の料理を謁し。要へ修日夜へ通タ。一方余人の誓
固よりて嚴重小守護へ奉りて跡うちざるを体と朝倉家小比がさば。
雲泥う。是小儀へ臺閣をじめ駕車までも詔縦と一日御体験あるを
不。同廿七日。織田と總歎。彦親公抱蟲然接絆ひ立正寺へ參と。一
朝ノ御禪端の式を行なき國綱の御を力からび小桃花馬。所與是沈香
縷羅金縷等。山は像く小林と。長岡城てもこもそもくは勝龍寺有
小。づきも織田の大恩を感す。君は左右小徳候せ。追响公方令をす。
信長の芳名を東満足の。身あり。移北と下も遠下上洛の馳走を忙む。
と詔意小信長謹んで。附請りよ。まわらをす。小臣前將軍は御恩を
被ふてまことに。海ハ山海もく比く小劣き。然べ御仇を滅して。泉下は
所懲をもじし候。もん。信長へ。新公方の御動慶まく。候。緯。信長が幸意

小恵ひあらぐく奉り。御連まぢかを多く。ハ候の御術經營つまらえ
き不。まとも不。日小供奉へ。そまく。怨敵之奸偽と謀戮して京都へ還
御。一命をづぶ。奉り。准。十餘日がた。久。因。めに。柱て當寺。御座。あ
べ。と言はせ。ご。義昭君。世ゆ。嬉しく。かや。まき。信長。御。宿を玉す
。小恵。と。見。不。多。意。然。に。信長。不。破。御。内。ち。村井。長。つ。ち。使。者。こ。そ。て。
小。皆。付。誠。き。遣。し。生。首。彰。君。御。通。行。の。機。會。く。ら。小。皆。下。の。御。祭。魚
毛と。方。か。ら。ぬ。馳。走。の。怨。態。動。小。乞。と。禮。附。こ。そ。次。小。に。列。へ。進。登。の。手。と
事。も。开。も。御。列。小。方。立。郡。の。守。護。御。井。殿。小。若。の。城。を。御。井。備。前。ち。安
政。が。そ。の。諸。路。を。奉。り。人。職。冠。孫。是。公。の。後。亂。閑。院。の。大。臣。又。嗣。公。の。苗
裔。ニ。象。大。納。言。公。綱。々。代。の。孫。う。其。の。人。皇。百。三。代。後。花。園。院。の。御。室。寶

徳二年の事。大納言公綱の初勤を蒙り。江戸に配流せらる。源井野丁野
村正びく居候ありし日。當巷の鄙女と至りて。他宅をもひる小道小
人の男と備く。之を覺て。威小きつて。父公綱御初勤が済りあつて
汝宿（よしゆく）たまふ。之を覺も。復毛（ひげ）とて。かねするまど。禁中を憚て。丁野村小姓さ
せらき。後の鐘とおぞきまで。東園光の絶刀と。母舟小艤て。情殘つも。獨
都へ還らせ。從ふく。御子へ生死をあす。此兎初稚（ちよ）にして。繁葱隣小
さくく。一歳の村うしが。母に向て。父と同母双袖小洞と。桃井て。而來を
精く詰て。所せ。遺賜の絶刀と。贈下。久備ハ賜し。亂あらじ。いふ生年を
家と。鄙人のも。やめを。遁去を。と思ひ起して。本の冬。寂の屋を
京極た京を。走る。之が。寧野の還るを。待多て。由緒と直説。奉公の
朝を。やまと。不。ある。清と。大。小。翁。ひ。丁。野。材。と。進ぜ。こゑ。小。より。て

源井新二郎藤原重政と号す。名小勤た萬と。前をも。之を。武道小最功
者。あまく。京極守。重く歎待。因出。一せど。こそ。を。なる。水元の頃。ふ。身
重政の孫。小新と。京極政。守といふ。と。ひ。り。る。又。び。れ。別。附。小。之。終。て。野
一村の。地。頃。よう。伐。て。発。京。急。五。郡。と。次。廢。け。小。谷。山。小。新。城。と。築。き。二。角。称。為
小。戰。勝。江。北。と。平。治。を。相。對。食。と。好。と。結。び。ト。野。ち。久。政。小。お。續。し。然。て。常
代。備。京。重。政。の。代。小。至。了。响。ハ。威。同。信。く。別。發。あ。ま。信。長。渠。と。も。燭。伏。小。翁。
ん。と。ほ。よ。好。と。結。び。と。あ。 源井之代。起。小。之。角。重。政。ハ。京。極。と。は。入。透。福。山。寺。の。教。院。の
お。ほ。と。板。活。於。大。佛。泰。夏。の。庵。徒。ひ。し。だ。お。負。深。く。そ。予。泰。寺。の。代。小。
事。も。こ。な。と。要。ん。で。遙。か。大。志。と。發。達。一。保。教。活。泰。利。大。持。吉。次。争。慶。先。傳。と。から。ひ。と。ほ。の。不。能。不。足。と。
て。不。の。政。を。幸。め。國。と。本。一。氏。と。お。育。毛。と。毛。よ。と。遙。小。京。極。と。板。活。泰。寺。の。法。事。を。三。事。と。是。く。は。既。せ。う。源。井。の。富。の。
亮。政。と。と。手。創。の。想。と。ま。事。と。是。く。は。既。せ。う。

徐本豊臣勲功記二編卷之七 終

